

論文の書き方

千葉工業大学 田隈 広紀

はじめに

本シリーズでは、これまで大御所の先生方が関連する文献・資料や、ご自身の豊富な論文執筆に基づくご知見を、簡にして要を得たスタイルで示されてきました。私がこのシリーズにおいて、これらに付け加えるべき知見・ノウハウは何も持っていません。ただ論文の書き方に限らず、おそらく世の中のほとんどの定石・セオリーには、その含蓄の他に「消化率」という要素があり、様々な人が手を変え品を変え繰り返し情報提示することが、多少役に立つのかもしれませんが。また近年ではグローバル化に伴い博士号やその取得に必要な研究業績の獲得に対する需要が上がってきていると感じています。そのような中で、特に社会人や修士課程までの学生等、論文執筆に向けた本格的な訓練を受けられる環境にない方に向け、より咀嚼した内容で論文の書き方を示すことに意義はあるのかもしれませんが。以上のような経緯で本シリーズへの執筆をお受けしました。

さてでは具体的に何を発信するのが良いか考えてみました。論文執筆の哲学、意義、プロセス、作法。これらはこれまでの本シリーズの記事を含め、すでに多くの資料が存在します。ここではそれらの知見を基に、実際に論文を書こうとする際に「どのようなことで躓き、どうやってそれを乗り越えていくのか」を、私自身の経験を基に記

したいと思います。この内容は、これから論文を書く人の「転ばぬ先の杖、転んだあとのキズ薬」になるでしょうし、論文執筆を指導する先生方にとっては「指導要領の参考」にもなるかと思えます。

1. 論文執筆のマインドセット

私自身は大学3年次に、このシリーズで複数の記事を書かれている梅田富雄先生の講義で「社会科学研究の進め方」を手解き頂き、その資料と記憶を頼りに論文を執筆してきました。不勉強なため中々そのセオリー通りの論文は仕上がらなかったものの、軸となる思想を学部生の段階でご教示頂けたのは、今思うと非常に幸運だったのかもしれませんが。さらに指導教員の西尾雅年先生の下、卒業研究・学会発表・そして論文投稿までトライさせて頂き、概ね厳しくも暖かいコメント（勿論そうでないのもありましたが）を頂戴し、それを基に論文執筆の技術を構築・矯正することができました。それから企業に入って社内報を書いた際も、社会人学生として亀山秀雄先生の下で学位取得のための論文投稿をした際も、また今現在でも「セオリーを軸に試行錯誤」しています。

ここから抽出できる論文執筆に必要な姿勢は、下記3点です。

- 1) セオリーの存在と重要性を認める
- 2) セオリーを習得する

3) セオリー通りの論文を目指して試行 錯誤する

当たり前のことしか書いていませんが、これらの履行を「覚悟」することが論文書きの入り口ではないかと思えます。まず、「セオリー」をスキップし、想い・人間力・経験だけで論文を書こうとしない方が良いでしょう。セオリーとは自他にメリットがあるから存在しており、この習得度が論文の執筆効率、質（＝採択率）、見解の積上げ易さに直結します。この辺りは特に経験豊富な社会人学生の方が陥りがちな、学位取得への「壁」と感じています。

また面倒に感じるかもしれませんが、最低1冊は「論文の書き方」を体系的に記した図書を読んだ方が良いでしょう。ベストセラー・バイブル的なものが良いかもしれませんが、平易なハウツー本でも十分得るものがあると思います。ただし所謂トップジャーナルへの論文掲載経験を有する著者の図書がお勧めです。1冊の本を読み込むには2週間くらいかかりますが、この座学によって、この後の「試行錯誤」の効率がグッと高まるはずですよ。

さてセオリーが頭に入ると、当然その通り書いてみたくなるものです。しかしどうしたことでしょう・・・中々筆が進みません。このような時どうすればよいのかについては次章に記しますが、ここでは「このような状況になることがごく自然」であることを記しておきます。問を立て、課題を定義し、解決策を策定し、それを客観的に評価する。このシンプルな問題解決のプロセスは、基礎であると同時に「極意」であり、徐々に練度を上げていく類のものです。ですから、いきなりセ

オリー通り書けなくともそれを悲観する必要は全くありません。

2. 初投稿時の論文執筆の要点

セオリーを学習した後、論文のフォーマットをダウンロードし、いざ「緒言」を書こうとしたところで、ふと「この論文、これでよいのか？」という不安がよぎり筆が止まる。このような経験をお持ちの方はいませんか？この不安の原因は、おそらく「この問題って本当に問題なの？」と「この雑誌で受け入れてもらえるの？」のいずれかではないかと思えます。また、単純に論文執筆作業自体にノウハウが無く、「学術論文っぽい文章が書けない」という理由で筆が止まることもあるでしょう。本章ではそれらのボトルネックを乗り越えるための私なりの方策を記します。

1) 問題意識に確信が持てない

これは研究で用いるメソッド（理論・手法・ツール等）を先回りして決めてしまっている場合に発生しがちです。例えば私自身の経験として、AHPとISMという分析手法を利用することは（なぜか）先に決めてあり、それに「問題」が上手くはまるよう問題提起の文章を書いたことがあります。結果として、「それって本当に問題なの？」という至極当然な査読コメントを頂戴することとなりました。現在学生を指導していても、「形態素解析と多変量解析を利用して」とか「プラットフォーム理論を適用して」等、メソッドを先出しして、肝心の問題設定が肚に落ちていないケースが散見されます。この

ような時「完璧を求めすぎても先に進まないのと、とりあえず書いてみる」という戦略もあるかもしれません。しかし問題設定は論文全体の設計に最後まで関わりますし、著者のモチベーションにも影響するため、一度は手綱を引き締めた方が良いでしょう。お勧めの軌道修正方法は下記です。

- ① 「ハイルマイヤーの質問」等の視点を用いて全体構想を整理する
- ② 上記の結果を「研究提案の適用対象の人」と「指導教員（または論文執筆力に長けた人）」に見て頂き助言を求める
- ③ 問題意識⇒提案事項⇒有効性の確認方法の順に研究の設計をブラッシュアップする

ここで注意して頂きたいのは、①と②との違いを重く受け止め過ぎることです。指摘を過剰解釈して自らの考えを「全否定」すると、独自性につながる視点が消滅してしまいます。また②の助言者は豊富な知見を背景に、しばしば初学者に対し支援・補強というより、批判・論破を呈されることもあります（ここは指導者が気を付けたいところですが・・・）。したがってやや暴論かもしれませんが、②の助言はあくまで著者にとって「受け入れられる部分」を反映すればよいと思います。重要なのは、聞く前に①で情報整理を行い、自己の「提案事項」については多少批判を受けても「それを参考に隙を減らして前に進める」気概を持つことでしょう。また、そこまでこだわりのある研究提案の青写真がないのであれば、指導教員等からテーマを提供して頂き、一度論文執筆を経験するのも良い経験になるでしょう。むしろこちら

の方が正しい型の習得、研究成果の質共に、良い結果になることが多いと思います。特に初回投稿時に「独自性・新規性が認められない」といったコメントを受けた場合、この方法がお勧めです。

重要なのは、「問題意識」を自己で整理し、有識者から助言（場合によってはテーマ提供）を頂き、提案・有効性確認との論理的なつながりを確立することです。個人的には、ここが最も重要で難しい工程と認識しています。

2) 投稿先に受け入れられる自信がない

これも初学者には常に付きまとう不安だと思います。これを払しょくする最も手っ取り早く効果的な方法は、当該誌の掲載済み論文のうち、自分の研究テーマに関係深い記事を4～5編選んでざっと読み込むことです。

最近では学会誌の電子配信が一般化しており、J-STAGE や Google Scholar 等のジャーナルプラットフォームも充実しています。これらの Web サイトでは、書誌名・分野・キーワード・被引用数等に応じた記事の検索と並び替えが、国内外の記事に対して簡単に実施できます。国際 P2M 学会誌を配信している J-STAGE でも上記の操作は実施可能です（被引用数での検索結果の並び替えは現在できません）。

この調査を行うことで、当該誌の土地勘（要求レベル、使われがち・使われないキーワード、章立て、本文や参考文献の分量等）が把握できます。また今後の課題等の記述から、自己の問題意識と研究提案の正当性を主張する土台となる情報が入手可能です。この情報を基に先行研究の問題意識、提案

事項（機能）、有効性確認の方法、残存する課題を表で整理すれば当該分野の学術研究のトレンドが掴め、それを基に自己の論文の位置づけを主張できれば、標題の不安はほぼ払しょくされるはずです。率直な印象として、これらの調査を行わずに漠然と不安を感じている方が相当数いらっしゃるように感じています。

ただここで気を付けて頂きたいのは、当該分野の「大御所・エース」の論文を読んで自信を失うことです。どのジャーナルにも上記のような研究者は存在し、多くの場合、編集委員の重職や大会のキーノート・基調講演を委嘱されていると思います。これらの先生と同様の視点から解決策を提案する場合、独自の有用性を主張することは相当難しいと思います。一方で、別の概念・手法・ツールや到達点（例証・傍証・検証）を狙うのはアリだと思います。重要なことは、その「違い」に該当する部分が何かと、その違いによって実世界でどのような効用がもたらされるのかを明記することです。

3) 学術論文っぽい文章が書けない

初めて論文を執筆される方は、そもそも言葉の表現や言い回しにも自信が持てないのではないのでしょうか？私自身は初回執筆時、例えば引用で「田中（2016）によれば」と書く際、「偉い先生を田中等と呼び捨てにしていいのか！？」等と一喜一憂していました。上記2)に記述した調査である程度の作法は頭に入るとは思いますが、いざ書いてみると「論文っぽい表現」ができ

ず、稚拙な文章になっていないか不安を覚えることもあるでしょう。

私は論文や著書で「この表現いいな」と感じた部分を、ネタ帳として保存しています（意図は単なるカッコつけです）。可能なら、普段から論文をよく読まれている方からざっと校閲して頂くのもアリだと思います。確かに表現が論文調で無いと読み手が違和感を感じてしまうので、「フォーマルな場で身形を整える」努力はするべきだと思います。ただこれは本質的なことではないので、一旦は我流で記述し、後で化粧直しするくらいの感覚でよいと思います。上記1)の研究の全体設計と、2)の調査に時間を割くことの方が、より重要です。

終わりに

以上、私自身の経験を基に思いつくままに記述してみました。引用もなく文字ばかりで4ページも書いてしまいましたが、少しでも参考になる個所があれば幸いです。現在、春・秋の大会前に「ビギナーズ・セミナー」というを開講していますが、私の担当コマでは45分程度で本記事の内容をより分かりやすくお話しています。また、P2Mの基礎や適用事例に関するショートレクチャーも提供されますので、特に当学会に初めて投稿される方は是非受講をご検討下さい。また個別のご相談も可能な限りお受けしますので、必要があればご一報下さい。

2019年7月20日受理